教えて。祐成先生（すけなり）

Interview
インタビューその1

現代社会は昔と比べ、人と人とが触れ合い、助け合う機会や空間そのものが減ったと言われます。それはどうしてでしょうか。市と連携協定を結ぶ信州大学人文学部の祐成先生に話を聞きました。

Q1 地域で触れ合う機会は、本当に減ったのですか。

内閣府の国民生活選好度調査では、定期的に「家族や職場以外でも積極的に新しい人々とのつきあいを広げていきたいか？」という質問をしています。それによれば、近年、「家族・職場で十分」という人が増えているようです。また、65歳以上の高齢者に対する別の全国調査を見ると、一人暮らしの男性では、近所での「つきあいはない」とする人の割合が４人に１人。そして、「お互い訪問しあう人がいる」人が女性に比べて３分の１ほど、という結果になりました。高齢者の孤独な生活実態がうかがえます。

Q2 どうして減ったのですか。

１つの理由は、利便性や効率を求める社会になってきたからでしょう。

例えば農地では、隣り合っていることに特別な意味が生じます。隣で水路が詰まると自分の田んぼに水が来なくなるわけですから、お互いのことをよく知っておく必要があります。一方で、水道が公共事業になれば、蛇口の向こうのことは専門の人に任せようということになりやすいでしょう。

また、自動車が普及する以前は、道は人や物が通過するだけでなく、交流の場や遊び場でもありました。機能を優先することで、確かに生活は便利になったのですが、それまで地域で共有されてきた場も失うことになったわけです。

Q3 地域の空間には、どんな変化がありましたか。

まず、住まいに着目してみましょう。

かつては家庭と職場が分離されておらず、多くの人手を必要とする農家や商家では、複数の家族や従業員が同居することも多かったのですが、夫婦と子どもからなる核家族が１つずつ住宅を持つようになりました。住まいから、職業や核家族以外の同居人が消えていきました。

逆に、家電製品をはじめとする新しい技術が導入されることにより、さまざまなことを家庭で済ませられるようになりました。高度経済成長期、「三種の神器（冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビ）」あるいは「３Ｃ（カラーテレビ、クーラー、マイカー）」という言葉が流行語になったように、プライベートな生活を快適にすることこそが豊かさであるという考えが広まりました。

リビングでテレビを見て、自動車で外出してレジャーを楽しむようになると、地域の必然性は薄れていきます。大都市の超高層マンションは、こうした暮らしを体現しているのかもしれません。各部分の機能が充実している反面、あいまいな場所が生まれにくくなっているのです。住宅と交通、そして地域のあり方は密接に関（かか）わっているといえます。

信州大学
人文学部文化社会学専攻
祐成（すけなり） 保志 准教授

社会学の立場から住宅史を研究。2007年に信州大学へ赴任後、安曇野市をはじめとする地域社会の調査に従事している。

ケアは手薄だった。そこで、家族をケアする場所をどのように作るか、という課題が浮かび上がります。こうした隙間は、基本的には、地域の住民たちが発見して、自分たちに合ったやり方で埋めていくことが望ましいと思います。そこから得られるものは計量化しづらい、つまり商品化しにくいものです。しかし、商品化しにくいからこそ価値があるともいえます。

地域の力は、人々が自発的に持ち寄るものです。余っている方が力を貸すと言ってもよいでしょう。誰でも突然困ることがあるのですから、もらう側にとってもあげる側にとっても、長期的にみれば帳尻が合うという関係にほかならないのです。そのあたりが、短期的に利益を得るように行動しがちな経済原則とは違うところでしょうね。

Q4 地域の場は、時代遅れ？

近年、社会福祉学などで「ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂（ほうせつ））」という言葉がよく使われるようになりました。多様な人々を包み込む力をもった場が求められているということでしょう。

居場所を失うという事態は、誰にでも起こりうることです。そのようなときに立場に関係なく助けを求められる場があると、心強い支えになると思います。

また、制度とプライベートな生活の間には、必ず隙間（すきま）が生まれます。例えば、介護保険という制度と家庭との間。介護保険は要介護者には機能的な制度ですが、看（み）ている家族側の

Q5 地域の力を再生するにはどうすれば良いでしょうか。

地域のつながりが弱まった要因として住宅の話をしましたが、もう１つ重要なのは職場のあり方だと思います。

日本の労働時間は欧米諸国に比べて極めて長いといわれています。特に男性では、職場こそが自分の居場所であると感じている人は多いのではないでしょうか。だからこそ、退職、とりわけ予期していなかった形で職を失うことは、経済的な面だけでなく、心理的な面でも大きなダメージを受けることになります。そうしたダメージを和らげるためにも、特定の場に依存してしまうのではなくて、性質の異なるいくつかの場にかかわっておくと良いかもしれないですね。地域はその１つになりえるでしょう。

これは、社会全体の「ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）」にかかわる問題でもあります。つまり、家庭と職場が変わらなければ、地域という場を再生することはできません。ただ、順序は逆でもいいと思うのです。まず、地域でのつながりを取り戻すことによって、家庭と職場のあり方を少しずつ変えていくこともできるのではないでしょうか。

人文学部准教授が答える
場ノチカラ Q&A